

氏名	お ぐろ まさ ちか
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	文博第338号
学位授与の日付	平成17年11月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目	プルーストとその時代 ——芸術作品と土地をめぐる研究

論文調査委員 (主査) 教授 田口紀子 教授 宇佐美齊 教授 杉本淑彦

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論が目指すのは、作家マルセル・プルースト(1871-1922)が終生大きな関心を寄せつづけた、広義での〈土地〉という主題の深化の軌跡を浮き彫りにして、作家の小説美学の生成と発展の流れを新たな角度から明らかにすることである。現在のプルースト研究の主流をなしているのは、『失われた時を求めて』をはじめとした作家の諸言説と、それらが生み出された時代のコンテクストとの関係を明らかにすることをめざした考察である。しかしながら、〈土地〉をめぐる同時代の文化的・社会的な言説がプルーストの思想に与えた影響に関しては、その重要性にもかかわらず、これまでほとんど研究されてこなかったといつてよい。この点に着目した論者は、とりわけ芸術作品と〈土地〉との絆をめぐるプルースト的思考が、時代の思潮といかなる接点を持ち、どのようにして独創性を獲得していったのかを、実証的なアプローチによって多角的に検証している。

イギリスの作家ジョン・ラスキンの美学との出会いを契機としてプルーストのうちに芽生えた〈土地〉に対する問題意識は、『ジャン・サントゥイユ』での試みと挫折、母とともに送った「翻訳の時代」、あるいは文芸批評の実践といった文学的営為のなかで徐々に深められてゆく。とりわけ、世紀転換期に書かれた数々の芸術論から『サント＝ブーヴに反論する』にいたる流れのなかで〈土地〉の主題をめぐる思考が描いた軌跡は、プルーストの文学的・美学的な模索と密接に関わりあっていた。プルーストは、思想や建築、記憶と〈土地〉とのあいだに築かれる絆を強く意識するいっぽう、〈土地〉に根ざすことの意義を強調した当時の芸術的・社会的・政治的な言説との距離をはかりながら、そうした絆の切断や、〈土地〉からの乖離に芸術的な意義を見出してゆく。〈土地〉に根ざすこと(あるいは根ざさないこと)をめぐる独自のヴィジョンはそのなかで培われ、『失われた時を求めて』に結実する小説美学の核を形成するまでにいたるのである。

本論第1部では、第三共和制下に著しい発展を遂げた美術館制度とプルーストとの関わりを切り口として、作家が芸術作品と〈土地〉との関係についてめぐらせた美学的思索の独創性を分析している。第1章では、プルーストの時代に盛んに唱えられた反美術館的言説—美術館は芸術作品をその起源の地から引き剝がすという批判—に着目し、プルーストがこの論議に接したことをきっかけとして、芸術作品の在り方をめぐる独自の考察へとむかう流れを検証する。1890年代後半以降、プルーストは〈土地〉との絆をめぐる思考を書きつけてゆくなかで、美術館をめぐる同時代の議論への直接的・間接的な言及を行ない、芸術作品の本質についての美学的考察を展開している。1900年4月に発表されたエッセー「アミアン大聖堂のラスキン」において、聖堂の「黄金の聖母」像とレオナルドの「モナ・リザ」を比較して展開した持論は、その一つの所産であった。プルーストは、〈土地〉に深く根ざした聖母像を「一人のアミアン女」と捉えるいっぽうで、〈土地〉の束縛とは無関係な「モナ・リザ」を「賞讃すべき無国籍者」と位置づけ、後者が獲得する「普遍性」に芸術作品の理想を重ね合わせる。〈土地〉から解放された作品の在り方について素描された思索は、のちに『花咲く乙女たちの陰に』(1919年)に差し挟まれる「美術館の部屋」についての一節に一つの結実を見ることになる。

第2章で検討されるのは、『花咲く乙女たちの陰に』第2部「土地の名-土地」の冒頭近くで展開される汽車旅行と駅に

関するプーレストの思索の美学的な意義である。論者が注目するのは、第1章で取り上げた「美術館」をめぐる「決定的な一節」(テオドール・アドルノ)が、半ば不意をつくようにしてそのなかに差し挟まれている点である。美術館はそこで、鉄道駅、すなわち近代の交通システムが必然的に形成したネットワークのハブである構築物と巧妙に重ね合わされ、プーレスト特有のトポスを形成している。論者によれば、一見まったく関わりをもたないかに見える二つの場の結びつきは、単なる恣意的な観念連合の産物ではない。19世紀が生んだ、美術館と鉄道駅という二つの近代的な場の交錯は、〈土地〉=コンテキストについての思考から導きだされたものであり、プーレストにおける〈土地〉の美学を考える上で極めて重要な要素が含まれているという。すなわち旅行=移動の出発点となる鉄道駅は、慣れ親しんだコンテキスト(寝室や母親との関係)からの乖離を引き起こす場ともなるが、プーレストはこうした根の切断を主人公の成長と結びつけて語ることで、それが芸術創造に携わる者に求められる条件であることを暗示するとされる。

第3章では、世紀転換期に国際的な隆盛を見た展覧会(美術史家フランシス・ハスケルのいう「儂い美術館」)とプーレストとの関わりが取り上げられる。近代的な空間装置としての美術館は、展覧会という大規模な文化事業の舞台となることにより、プーレストに新たな芸術体験の契機をもたらした。プーレストはとりわけ、1898年10月、アムステルダムで開かれたレンブラント展において世界各地から集められた作品群を鑑賞し、大いに啓発された。このオランダ訪問は、積極的な旅行者であったとはいえないプーレストが、芸術作品の鑑賞を目的として国外にまで赴いた数少ない機会の一つであった。論者によれば〈土地〉と芸術作品との絆について考察するうえでこの体験が重要なのは、プーレストを惹きつけた展覧会という催しが、芸術作品そのものの〈移動〉に加えて、芸術作品の鑑賞を目的とした人々の〈移動〉に関する問題と不可分な関係にあるからである。この経験は、美術館へと変貌を遂げつつあったギュスターヴ・モローのアトリエ=邸宅への関心と交錯することで、芸術作品と向き合うために必要な場や、芸術作品が置かれるべき場、あるいは芸術家が創りだすべき場=芸術作品についての思索へとプーレストを導いた。

第2部で論者は、1900年代初頭の文芸批評の動向や、歴史的なモニュメントをめぐる言説に照らしながら、プーレストにおける〈土地〉という主題と小説の創造行為(エクリチュール)との連関を探っている。第1章では、プーレストが「ジュルナル・デ・デバ」紙上で日常的に眼を通していた伝統主義的批評家アンドレ・アレーの言説が取り上げられる。フランス各地を「巡礼」して〈土地〉や史的建造物の美について書き残したアレーの理論を把握したうえで、プーレストがそこから何を吸収し、どのように距離を取っていったのかを明らかにする試みである。プーレストが終生抱きつづけた教会建築への美学的・芸術的関心は、〈土地〉の近代的な開発や史的建造物の修復=破壊、あるいは政教分離政策による教会建築破壊の危機といった問題とも無関係ではなかった。そのことは、アレーが残した言説を指標とすることによって浮かび上がる。論者によれば、プーレストは〈土地〉の歴史を体現するモニュメントを伝統主義的な観点から称揚することに疑念を抱いたが、だからといって建築の修復行為を批判する尚古の原理主義にも与さなかった。すなわちナショナリズムや術学的議論とは一線を画し、「私的な印象」に徹底的なこだわりを示すことで、モニュメントの本質を救う文学的な選択を固めるにいたったのである。

第2章では、このような思考回路のなかでなされた、ジェラルド・ド・ネルヴァル作『シルヴィ』の再読と、同作品をめぐるプーレストの批評的実践を取り上げている。20世紀初頭、モダニズムへの急速な傾斜のさなかに、あえて古典を称揚し、「古典復興」《renaissance classique》をうたった一群の作家たちがいた。この動向の奇妙な再解釈によって、ネルヴァル像はフランスの本質を体現する古典的な地位へとまつりあげられようとしていた。プーレストはこの傾向に反発し、誤った文学解釈に警鐘を鳴らそうとして『サント・ブーヴに反論する』のネルヴァル断章を執筆するに至ったと考えるのが自然である、と論者は指摘する。つまりプーレストは、ネルヴァルをイル=ド=フランスの文化風土に根ざした作家とみなすことに批判的であり、ネルヴァルに「伝統的でフランス的な」特質ばかりを見るのではなく、むしろ夢幻的なハイマート幻想としてのヴァロワのイメージに注目する。このことがやがては、幼少時の記憶と結びついたコンブレという〈土地〉を描き出す素地の形成に貢献することになる。

第3部では、『失われた時を求めて』に描き出されたヴェネツィアとコンブレに焦点をあて、二つの〈土地〉の崩壊・破壊をめぐるエピソードが検証される。論者によればネルヴァルの美学から多くを吸収したとはいえ、『失われた時を求めて』が単に懐古的な「故郷回帰」を演出して見せたわけでは毛頭ない。この小説では、かつての記憶の源泉を求めて〈土

地〉に帰還することは否定されているからである。その意味でブルーストは、「ジェラルドよりも遠くへ」進もうとした、とされる。その根拠としてあげられるのが、第1章で取り上げるヴェネツィア滞在の挿話である。論者は、実体験に基づいたこのエピソードの終わりに描かれる「ヴェネツィアの廃墟」は、これまで考えられていたように、母との離別の不安を象徴するためだけに挿入されたものではない、と主張する。それは、主人公がこの〈土地〉に立ち返る可能性を失ったこと（もはや帰還する必要がないこと）を象徴的に物語っている。ルネサンス以降おびただしい画像と文章を生み出してきた水都ヴェネツィアは、19世紀末から20世紀初頭においても、バレスをはじめ多くの文学を生産してきた。ブルーストの時代のヴェネツィアは、すでに手あかにまみれた都市＝モニュメント、栄光の「過去」を喚起する歴史の場として描かれていた。しかしブルーストがエクリチュールとして定着しようとしたのは、都市の歴史でもラスキンの残した足跡でもなく、実際に足を運んだ〈土地〉の思い出であった、と論者は言う。重要なのは、個人的な記憶と結びついたこの〈土地〉＝モニュメントの喪失が、過去＝思い出の消去に直結するものではないという点である。それはむしろ、私的記憶がすでに別なかたちで保存されたこと（「内的な書物」への書き込み）を物語る光景として解釈されるべきものである、と論者は主張する。

第2章では、〈土地〉と記憶をめぐる前章の分析をふまえて、小説内の地理的な設定を変更してまでコンブレを第一次世界大戦の戦火に曝したブルーストの意図を探る。ヴェネツィアの破壊が主人公の内的ヴィジョンに映し出された心的な光景にとどまったのに対して、第一次世界大戦におけるコンブレの破壊は、物語内で実際に起こった現実として設定された。ブルーストは、シャルトル近郊にあったはずのコンブレを、激戦が繰り広げられていたシャンパーニュ地方に「漂移」し、サン＝チレル教会をはじめとした数々のモニュメント＝「記憶を喚起するもの」を破壊させる。論者によれば、主人公＝語り手が根ざした起源の〈土地〉の喪失は、〈書物〉の創造を見すえたブルーストが、作品構造のモデルとして想定していた「大聖堂」のモニュメント的な在り方を乗り越えようとする試みでもあった。

過去との関わりを保証する記憶装置としての〈土地〉を否定＝破壊したさき、独自のエクリチュールを立ち上げる。そして、「内的魂」という「真の祖国」に刻まれた記憶を「翻訳」することで生まれる〈書物〉が、特定の〈土地〉に束縛されることのない普遍的な芸術作品として実現されること。小説の最終巻に描き込まれたコンブレの破壊は、〈土地〉の絆をめぐる思索から導きだされた、ブルーストの美学的な到達点をあらわすテキストであると、論者は結論する。

## 論文審査の結果の要旨

本論文はフランス20世紀初頭の小説家マルセル・ブルースト（1871-1922）の思想を、19世紀末から20世紀初頭にかけてのフランスで重要な問題系を形成していた、広義の「土地」という主題を中心に再検討したものである。

「土地」というテーマは、ブルーストの代表作である『失われた時を求めて』においても、もっとも重要なテーマの一つである。そしてそれは「記憶」「起源」「時間」といったこの作品に本質的な問題が交差する「場」でもある。

論者はこのような重要性を持ちながら、これまでほとんど行われてこなかった、「土地」をめぐるブルーストの思索の形成、発展の過程についての検証を行い、さらにそれを同時代の議論と綿密に比較・対照することによって、ブルーストの美学が持つ、社会的、歴史的射程の一端を明らかにした。

第1部はフランス第三共和制下に著しい発展を遂げた美術館制度とブルーストとの関わりに光を当て、作家が芸術作品と土地との関係についてめぐらせた美学的思索を分析したものである。

第1章では当時の美術館批判（美術館は芸術作品をその起源の地から引き剥がすという批判）に反対する立場から、ブルーストがそのエッセーにおいてアミアンの大聖堂の「黄金の聖母」像を土地に根ざした「一人のアミアン女」ととらえる一方で、レオナルドの「モナ・リザ」を「賞賛すべき無国籍者」と位置づけ、後者が獲得する「普遍性」に芸術作品の理想を見いだしていることを論証する。

第2章では、「鉄道駅」についてのブルーストの考察を問題とする。作品において鉄道駅は主人公を慣れ親しんだ生活の場から引き離し、主人公の「根」を断ち切ることで彼の成長を促すものとして語られている。ここに論者は「根の切断」が芸術創造に携わるものの条件であることが暗示されていると見る。

第3章では、世紀転換期に国際的な隆盛を見た展覧会とブルーストとの関わりを論じる。展覧会という催しは、芸術作品そのものの移動に加えて、鑑賞を目的とした人々の移動を促すという意味で、「美術館」と「鉄道駅」の双方にまたがる

ポスでもある。プーレスト自身も出向いた1898年のアムステルダムで開催されたレンブラント展の印象が、芸術作品とそれがおかれるべき「場」、さらには芸術家が作り出すべき場＝芸術作品についての作家の思索を深化させていく過程を、その未完の断章から跡づけた。

第2部は、1900年代初頭の歴史的モニュメントをめぐる文芸批評の動向と、プーレストの「土地」の主題の関連を検証したものである。

第1章は当時の伝統主義的な批評家、アンドレ・アレーが新聞に連載した「そぞろ歩き」（フランス各地の歴史的建造物を「巡礼」し、フランスの起源をそこに見いだそうとする記事）を、プーレストがどのように読み、影響を受け、さらにそれを乗り越えるにいたったかを、諸資料からたどったものである。

第2章では、当時の「古典復興」運動により、フランスの本質を体現した作家として再評価されようとしていたジェラルド・ド・ネルヴァルに対するプーレストの理解を、前章で検証したアレーの伝統主義の超克という文脈に置き直してその再解釈を試みた。プーレストにとってネルヴァルは「伝統的でフランス的な作家」ではなく、むしろ夢幻的なハイマート幻想としてのヴァロワ地方のイメージに根ざした作家である、と論者は主張する。ネルヴァルの『シルヴィー』が『失われた時を求めて』において、作家自身の幼少時の記憶と結びついたコンブレという土地の創作に繋がったことはすでに知られているが、そのことの背景に伝統主義的な「古典復興」運動への反発と、個人的な記憶の重視があったことを、作家のメモや批評断章から明らかにしたことは、この論文の大きな功績である。

第3部では『失われた時を求めて』に描かれたヴェネツィアとコンブレという二つの「土地」の崩壊をめぐるエピソードを検証し、それらがネルヴァルのように、単に懐古的な「故郷回帰」を目指したものではなく、芸術創造についての思索として読むことができることを示す。

まず第1章で、論者は主人公にとって（そして作家にとっても）母親との思い出の地であるヴェネツィアの崩壊が作品中で物語られることの意味を論じ、それがモニュメント＝「歴史を喚起する場」の喪失を表すのではなく、私的記憶が「内的な書物」に書き込まれ、保存されたことの証であることを検証する。

続いて第2章で論者は、主人公の故郷コンブレを、小説内の地理的な設定を変更してまで、第一次世界大戦の戦火に曝したプーレストの意図を探る。教会をはじめ、様々なモニュメントを破壊することで、作家は主人公の起源の記憶装置としての「土地」を否定し、「内的魂」という「真の祖国」に刻まれた記憶を翻訳することで生まれる「書物」が、特定の「土地」に束縛されることのない、普遍的な芸術作品として実現されることを自らの美学的到達点として示そうとしたのだ、と論者は結論する。これまで「歴史の書き込み」という視点からとらえられてきたコンブレの戦争による破壊を、文学創造の営みとの関連において再解釈したことは、この論考の独自の視点であり、これまでの考証的議論と比べて、プーレストの作品創造の根幹に大きく迫るものである。

以上その要旨にそってそのすぐれた点を見てきた本論文にも、もちろん問題がないわけではない。一次資料や先行研究に忠実であろうとするあまり、文章に引用符が多く、時として論者の立論が見えにくくなることがある。また「土地」というテーマをめぐる個々の論点の内的関連、さらには全体の議論の展開の必然性がややわかりにくい。しかしこれらは論者の学問的誠実さと、テーマの大きさが原因であり、むしろこれからの論者の研究の発展を予感させるものである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2005年8月10日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。